



『ぼくたちは見た-ガザ・サムニ家の子どもたち-』

2011年制作／86分／古居みずえ監督作品

1400人という多くの犠牲を出した、2008年から09年にかけてのイスラエル軍によるパレスチナ・ガザ地区への攻撃。ジャーナリスト・古居みずえは、攻撃直後に現地に入り、300人以上の子どもたちが犠牲になっていたことに大きなショックを受け取材を始める。ガザ南部の農業地帯ゼイトゥーンに住むサムニ家の子どもたちは、一族が一度に29人も殺されるという、過酷な事件を経験していた。古居みずえのカメラは、家族を失いながらも、懸命に生きる子どもたちの生活を静かに見守り、彼らの心の傷と変化を写し出す。20年以上パレスチナに通い続けてきた古居みずえだからこそ描きだせた、事件の後の“真実”。それに触れることは、瞬間的に消費される情報が飛び交う中で、「世界を理解するために知るべきことは何か？」を示してくれるだろう。（ぼくたちは見た公式HPより）

古居みずえ監督



古居みずえ氏プロフィール

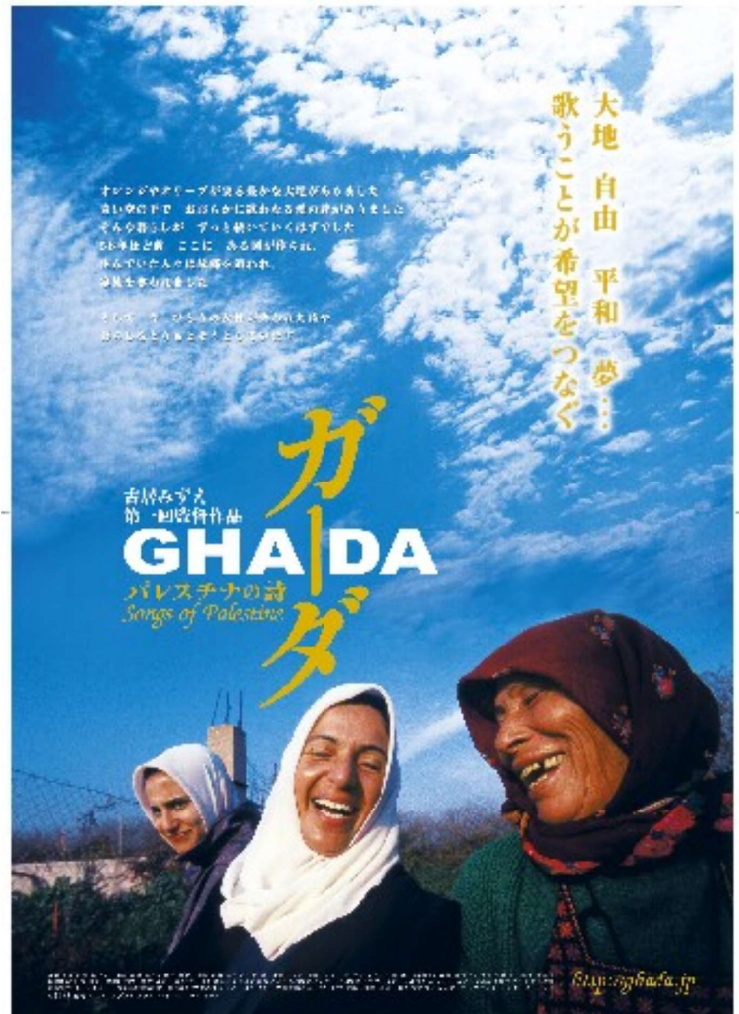
ジャーナリスト、映画監督。アジアプレス・インターナショナル所属。1988年より中東パレスチナに飛び込み、女性や子どもたちに焦点を当てて取材を行う。2011年の福島第一原発事故をきっかけに福島県飯館村に通い撮影を続けている。主な著書に『パレスチナ 戦火の中の子どもたち』（2015年岩波書店）『飯館村の母ちゃんたち』（2023年彩流社）がある。

『ガーダ ～パレスチナの詩～』

2005年制作／106分／古居みずえ監督作品

12年間で撮りためた500時間を超える映像には、女たちの暮らしと闘いが刻まれている。銃弾が飛び交う難民キャンプの粗末な家の中で、赤ん坊をあやし菓子を作る。歌うことが彼女たちの闘いだった・・・。（DVDより）

ガーダは、古い慣習の残るパレスチナ社会で自立を探求し、さらには、イスラエルによって土地を奪われる以前の、パレスチナの人々の暮らしを求めて聞き書きの旅を始める。自然豊かなパレスチナの風景をバックに、語り継がれてきた素朴な詩歌の数々が紹介されてゆく。ガーダというパレスチナ女性の生き様を通して、いまだに残る古い慣習を浮かび上がらせると同時に、パレスチナの原点を新しい世代につないで行こうと決心する1人の女性の成長を描く。（映画.comより）



※この上映会はパレスチナ・ガザ支援の緊急上映会です。皆さまからの支援金は上映経費を除く全額を日本のNPO法人「パレスチナ子どものキャンペーン」に寄付します。定員80名。受付順。申込みはチラシ表面のQRコードから。12月25日16時締め切り。それ以降は直接会場にお越しください。但し満席で入場をお断りする場合がありますので、なるべく事前申込をお願いします。